

# フード・エシックスとはなにか

—— R・L・サンドラー『フード・エシックス』を読む ——

## 目次

- はじめに
  - 一 問題としての食べ物
  - 二 フード・エシックス
  - 三 本書の概要について
  - 四 本書の特徴について
- おわりに  
読書案内

馬 渕 浩 二

## はじめに

小論は、『ロナルド・L・サンドラー『フード・エシックス』(Ronald L. Sandler, *Food Ethics: The Basics*, Routledge, 2015)の書評である。著者は現在、アメリカ合衆国のノースイースタン大学の哲学教授であり、同大学倫理学研究所の所長も務めている。二〇〇一年にウイスコンシン大学マディソン校で博士号を取得した。多数の研究業績があるが、本書を除いて、単著の単行本のみを記すと以下の通りである。

*Character and Environment: A Virtue-Oriented Approach to Environmental Ethics*, Columbia University Press, 2007.

*The Ethics of Species: An Introduction*, Cambridge University Press, 2012.

小論では、本書の主題であるフード・エシックスの輪郭を描いたうえで、本書がどのような内容からなる本であるかを解説する。

## 一 問題としての食べ物

- (2) 私たちの周りには食べ物が増えている。その意味で、食べ物は有り触れた存在であるように見える。だが、食べ物は、私たちの世界のうちに存在するものなかでも、ひどく特異なあり方をしていて、というのも、食べ物は、私たちにによって食べられる存在だからである。私たちにによって食べられるがゆえに、あるものは食べ物となる。食

べ物と食べる行為とは切り離すことができない。

それならば、なぜ私たちは食べるのだろうか。それなしには私たちの生命が枯渇し途絶してしまうがゆえに、私たちは食べる。食べるという行為を通じて、私たちは食べ物を直接にみずからの身体の内に取り込む。その結果、食べ物は私たちの内部に一定の時間とどまり、私たちの身体を、だから私たちの存在そのものを構成するようになる。食べ物は、私たちの生命を支えるために、私たちの身体に取り込まれるよう運命づけられた存在である。食べ物は、私たちの生の可能性の条件である。人間の他者でありながら、人間によってその内部に取り込まれ、人間の存在を構成するよう運命づけられた存在——そのような存在は食べ物以外にない。だからこそ食べ物は特異な存在なのである。

もちろん、空気や水も私たちの身体に取り込まれるという点で、同じ存在価を帯びている。だが空気や水は無機物である。一方、食べ物は有機物である。いやむしろ、食べ物は生命そのものである。採れたての瑞々しいトマトを口に頬張るとき、まだ少し温もりの残る生卵の殻を破り、黄身と白身を箸で勢いよくかき混ぜるとき、あるいは釣ったばかりの川魚に串を刺し、それを焼き火で焼くとき、私たちはそれらの生命を奪っている。私たちは、みずからの生命を維持するために他の生命を奪う。あるいは、他の生命を奪うことなくして、私たちは生きてゆくことができる。食べ物が私たちの生の条件であるとすれば、他者の生命を奪うことこそ私たちの生の条件である。それだから、食べることに、どこか拭い去りがたい罪深さが宿っている。そうであるにもかかわらず、私たちは食べなければならない。そうであるなら、どのように他者の生命を食べるべきなのだろうか。そんな問いが湧き上がってくることだろう。

あるいはまた、食べ物と食べる行為の結びつき方があまりに多様である点で、食べ物は特異な存在である。なにをどのように食べるのか。このことは、食べる者が生まれ育った文化によって強く粹取られる。人は、様々な生命を様々な仕方でも食べ、そして食べない。ある文化の住民が、自身の食さない物が異文化の住民によって食されるの

を見ると、強烈な嫌悪や気味の悪さを感じることもある。「生理的に受け付けない」という言い方さえなされることもある。このとき、「生理」は文化によつて規制されている。それだから、食べ物は単に生物学的な生命を維持するための物質であるだけでなく、ある人物がどのような文化に育ち、どのような価値観のもとで生きているかという事態さえ表すことになる。食べ物は文化である。ある者が食べ物を食べることができないとき、それは単に生物学的な危機を意味するのみならず、その者の文化が剥奪されること、つまり文化的な危機をも意味することがある。ただ食べればよいのではない。なにをどのように食べるのが、ここでも問題となる。

食べ物を食べるという営みは、だから、単に生物学的な営みにすぎないのではない。食べることは、人の生き方に関わる出来事なのである。つまり、なにをどのように食べるのかという問題は、なにが善い生き方なのか、なにが正しい生き方なのかという問題に直結するのである。だが、普段の私たちの食生活は、食べ物と倫理とが密接に連関しているという事実を忘却させる。たとえば、私たちの周りに溢れる食べ物は、多くの場合、程度の差はあれ、すでに加工されているから、それがなにかの生命であつた痕跡が拭い去られ、生命の気配が消去されている。あるいは私たちは、食べ物が並べられた棚から気に入った食べ物を選び、貨幣を支払うだけで、食べ物を手に入れることができるから、大量の食べ物がどのようにして生産されたのか、だれがどのような環境でその食べ物を作り出したのか——だれかの健康や権利を損なうことで生み出された食べ物かもしれない——、そうしたプロセスが、私たちの眼から隠されてしまう。しかし、他者の倫理的に重要な事柄を犠牲にして生み出された食べ物を、無批判に食べることは許されるのだろうか。さらには、そもそも、私たちの周りに食べ物が溢れているという事態は、地球規模で考えると、あるいは遙かなる人類史を射程におさめて考えると、きわめて稀有なことである。私たちなら容易に食べることができるという事態は、私たちだけではなく食べられない者たちが存在したこと、そして現在も存在することを忘却させてしまう。私たちだけが豊かに食べてよいのだろうか。私たちだけがこの特権を享受してもよいのだろうか。

かくして、私たちは、食べ物を別の角度から見ることが学ばなければならない。食べ物を食べることの周りに張り巡らされた自明性のベールを剥ぎ取らなければならない。食べ物は、それ自体が一個の思考の課題とならねばならない。そして、この課題に答えようとするのが、他ならぬフード・エシックスである。たしかに、これまで、哲学や宗教、あるいは思想が、食べることをめぐって様々な思考を紡いできた。本書の主題であるフード・エシックスも、こうした思考の系譜にしっかりと連なっている。とはいえ、フード・エシックスは、そうした系譜のうちにはありながら、それが生み出された文脈という点で、異彩を放っている。フード・エシックスは、現代において食べ物が被りつつある巨大な変容に対する応答として立ち上がったものだからである。のちに触れるように、遺伝子組み換え生物の是非、畜産工場の是非といった問題は、まさしく現代が生み出した問題である。こうした問題は、かつての人類には知られていなかった問題である。だからこそ、食べることを批判的に見直す必要性が、現代ではずっと高まっているのである。

## 二 フード・エシックス

ところが、この国においては、このフード・エシックスの必要性が十分に認知されているとは言い難い。そのような事情は、フード・エシックスの訳語をめぐる状況のうちに端的に現れている。フード・エシックスという語を直訳すれば、それは「食べ物の倫理学」となる。食べ物という表現があまりに日常的にすぎたイメージから遠いとすれば、フードを食料と訳し、食料倫理学という訳語を用いることもできるかもしれない。食料という言葉が堅すぎるとしたら、今日的な表現を用いて「食の倫理学」と言い換えることもできるだろう。あるいは、文脈によっては食品の倫理学と訳すこともできるだろう。現時点においては、いずれの訳語を用いてもかまわない。なぜなら定訳が存在しないからである。定訳が存在しないのには理由がある。誤解を招く言い方になるけれども、簡単

に言えば、その必要がなかったということである。すなわち、フード・エシックスという名で一群の研究を包括し提示する必要がなかったということである。事実、たとえばこの国の倫理学系の代表的な二冊の辞典（『現代倫理学事典』と『応用倫理学事典』）には、フード・エシックスの語がエントリーされていない。このような事態は、たとえば英語圏においてフード・エシックスという名を冠した単行書やアンソロジーが数多く出版されているのとは対照的である。

もちろん、このことは、フード・エシックスと呼ばれるべき研究がこの国に存在しないことを意味しない。たとえば、肉食は許されるのかどうか、グローバルな飢餓の問題をどのように考えるのかといったことに関する研究は、この国においても行われている。こうした問題が、フード・エシックス、つまり食べ物の倫理学という表題のもとで提示されていないだけなのである。食べ物をめぐる倫理学的思考は、現代においては極めて重要な問題の一つであって、それはフード・エシックスという表題があるうがなからうが、思考されなければならないし、事実、思考されている。

それではフード・エシックスとはなんであろうか。きわめて大掴みにいえば、食べ物をめぐる倫理学的思考の集合体がフード・エシックスである。つまり、フード・エシックスは、倫理学の立場から、あるいは倫理学という視点から、食べ物の問題にアプローチする。このような形式的な説明が一応は可能である。ただし、このような説明では、フード・エシックスの内実はわからないままである。この説明が内実を伴ったものとなるためには、倫理的にアプローチすることとはどういうことなのか、つまり倫理学とはなんなのか、そして、なぜ食べ物が倫理的に考察されなければならないのか、そのような問いに答える必要がある。それゆえに、こうした問いについて、ある程度の見取り図を与えてから、本書の内容に踏み込んでゆくことにしよう。

まず、倫理学はどのような学問の営みなのかという点から、駆け足で振り返っておく。倫理学は哲学の一部であり、哲学の思考が倫理に向かうとき、倫理学が成立する。倫理とは、簡単に言えば、私たちが日々したがっている

規範を意味する。規範とは、私たちの行為を導く基準あるいは模範を意味する。つまり、なすべきこと、なしてもよいこと、なしてはならないことを指令するのが規範である。規範には法や慣習などいくつかの種類があるが、倫理的な規範とは、「殺すな、盗むな、騙すな」といったように、人間が人間であるためには不可欠の、かつ根源的な規範のことである。それでは、倫理学が倫理を研究するのは、なぜだろうか。たとえば、殺すなという規範を見てみよう。殺人を禁じる倫理はあまりに自明であるように思われる。だが、安楽死はどうだろうか。それは殺人なのだろうか。殺人なのだとしたら、それは許されないことなのだろうか。安楽死が許されるにしても許されないにしても、その根拠はなんだろうか。そのように問うことが可能である。

日常生活においては、私たちはほぼ自動的に倫理にしたがって生きているから、倫理そのものを対象化して反省することがない。だが、いま言及した安楽死のような問題は、倫理規範の自明性を揺さぶるような問題である。だが安楽死を希望するとき、その希望にどのように応じることが、周りにいる者たちにとって正しい行為なのだろうか。そのように問いが深まってゆく。そのとき、普段は自明であった倫理がその自明性を揺さぶられ、真剣な思考の対象に変貌してゆくのである。安楽死のような問題は、どのように行為することが人間として正しい行為なのか、どのように行為することが人間として善いことなのかという問いへと私たちを導いていく。

ことは安楽死にとどまらない。地球環境の悪化がだれの目にも明らかになっていく現在、大量生産・大量消費・大量廃棄の生活を続けることは、倫理的に善いことなのであるか。爆発的な進歩を遂げているAIは、今日、兵器の無人化へと応用されつつあり、無人の兵器による攻撃の是非が議論的となっている。そのような兵器を開発することは倫理的に善いことなのだろうか。遺伝子編集の技術が飛躍的に発展し、様々な特徴をもった生物を自由に作り出すことが可能になりつつある。この技術を人間に応用すれば、親が自分の好みどおりの子どもをつくりだすことが可能になるかもしれない。しかし、それは人間として許されることだろうか。なにが人としてやってよいことであり、なにをしてはいけないのか。許容されることと禁止されることについて考えなければならぬ多様な

問題で、この世界は溢れかえっている。

食べ物を食べることも、このような許容と禁止をめぐる倫理的・倫理的思考の対象となる。食べ物を食べることは、私たちの生活の、あまりにありふれた事柄であるから、そもそも許可や禁止といったような話題とは無縁であると思われるかもしれない。だが、すこし考えてみると、むしろ食べ物こそ倫理的思考の舞台としてふさわしいことが明らかになる。その消息をたどってみよう。

私たちは、食べることで生きている。いや、食べなければ生きてゆくことができない。食べることは、それゆえに、私たちの生の条件である。このことはある意味では自明のことである。だが、この自明性が揺らぐ瞬間が、それだから、食べることを問い直すように求められる瞬間が、かならず到来する。なにをどのように食べたらいのだろうか。このように問わざるをえない瞬間が到来するのである。こうした問いは、まずは健康という文脈において登場するだろう。遺伝子組み換え食品、ジャンクフード、インスタントフードの善し悪しは、まずはそうした健康という文脈において問題となる。だが、それに留まらず、私たちは、なにを食べることが倫理的に善いことなのかを問わなければならないこともある。

(8) 一例として、最近マスコミでも取り上げはじめられた食品ロスの問題を見てみよう。食料の生産、運搬、保存、小売り、消費の場面で発生する食品の消失が食品ロスである。食品ロスは、腐敗によるもののほかに、賞味期限などのせいで食べられずに廃棄されるものも含む。この国の食品ロスについては、深刻と形容しても間違っていないだろう。なぜなら、日本の食品ロスは、国連食糧計画による食料援助の二倍をまかなえる量に相当するからである。極度の貧困状況にあるがゆえに慢性的栄養不良に苦しむ人々の状況を改善するのに十分な量の食料を私たちは食べずに捨てているのである。私たちが、この国で何かを食べるといことは、意図してはいないにしても間接的にこの状況を支えることを意味する。このような「食生活」は、はたして人間の生き方として「正しい」ものであろうか。



食べるという事柄をこのように深めてゆくと、食べることは、私たちの生物学的生命（ジョー）にかかわる問題であるだけでなく、私たちの倫理的な生（ビオス）にかかわる問題であることがわかる。なにをどのように食べることが、一人の人間の生き方として善い生き方なのか、あるいは正しい生き方なのか。そのように問わなければならないのである。こうした問題を考えるのが、フード・エシックスである。何を食べるのが倫理的に許されるのだろうか。どのようにして作られたものが倫理的に善い食べ物であるのだろうか。フード・エシックスは、こうした問いを真剣に考える。なにかを食べることの自明性が、フード・エシックスにおいて解体される。食べるということの生の基本的事実が、フード・エシックスによって問い直されるのである。

### 三 本書の概要について

それでは、本書は具体的にどのような話題を取り上げているのだろうか。第1章では、フードシステムをめぐる諸問題が取り上げられている。自給自足の生活をするのでないかぎり、私たちの食べ物は、生産、流通、加工処理、小売り、処分といった複雑なプロセスを経由して、私たちの手元に届く。そして、このプロセスには、個人、企業、団体、国家といった様々な行為主体が複雑に関与している。このような多様な要素が織りなして生み出しているのが、フードシステムである。私たちの食べ物は、このフードシステムを経て、私たちの手元に送り届けられる。だから、どのような食べ物を食べることが倫理的なのかという問いを考えることは、このシステムの倫理的評価と直結する。なぜなら、食べ物はこのシステムによって生み出されているのだからである。今日のフードシステムは、グローバル化し、産業化している。このグローバル・フードシステムに対しては、低賃金で危険な労働を通じて労働者の権利や福祉を蔑ろにしているのではないか、工場型畜産によって動物福祉を蔑ろにしているのではないか、また動物の排泄物や農薬などを通じて生態系に悪影響を与えているのではないか、伝統的な農業を危機に陥

れているのではないか、食品の画一化によって食品を鑑賞する力、あるいは美学を奪っているのではないか等々、多様な懸念が向けられている。こうした懸念に駆動されて、オルタナティブなフード運動（オーガニックフード、スローフード、ローカルフード、フードジャスティス）が繰り広げられている。はたして、どのようなフードシステムなら、倫理的に正しいといえるのだろうか。第1章では、そうした論点が詳細に、そして見通しよく解説されている。

第2章では、食料安全保障の倫理学が主題となる。食料安全保障 (food security) とは、簡単に言えば、必要なときに必要な量の食料が人々に確保されることである。食料安全保障が実現しないとき、食料不安・食料不足 (food insecurity) が発生する。この問題も、食べ物めぐって考えるべき深刻な倫理的問題である。正当な理由もないのに食料が入手しえないなら、それは人々の福祉や生存権を脅かす深刻な事態であって、そのような状況はまさに倫理的に問題がある。それゆえに、十分な食料が入手可能であるかどうかということは、政治的・経済的な問題であるだけでなく、それと同時に、あるいは、それに先立って、すぐれて倫理的な問題なのである。事実、世界には貧困のせいで十分な食料を手に入れることのできない者たちが多数存在する一方で、手に余るほどの食料が入手可能な人々もいる。前者の窮状を無視して食べ続けることが後者には許されるだろうか。つまり、そのような食生活は倫理的に正しいのだろうか。正しくないのだとすれば、見知らぬ他者の食べ物のために、私たちはライフスタイルを変えるべきだろうか、寄付すべきだろうか、国家を動かすべきだろうか。そうした疑問が生まれてくる。第2章は、そうした義務を正当化する様々な理路が紹介されている。

(10) 第3章は、フード・エシックスにおける、もっとも有名なテーマが扱われている。肉食の倫理的な是非である。肉を食べることは世界中で広く行われているが、それにもかかわらず、肉食はまさに倫理的に問い直されるべき対象である。なぜだろうか。今日のフードシステムのもとでは、多くの肉がCAFO (Concentrated Animal Feed Operations) に由来するからである。CAFO、すなわち集中家畜飼養施設——閉鎖空間に多数の動物が閉じ込め

られる——に由来する肉を食べているかぎり、私たちは動物を苦しめることによって肉を食べることができていられない(動物福祉の問題)。また、CAF O由来の肉を食べているかぎり、私たちは生態学的に悪影響を及ぼしている可能性がある(生態学的影響の問題)。またカロリーや栄養という視点から評価すると、CAF O由来の肉はきわめて非効率的である。なぜなら、人間が家畜の肉から取り込む栄養やカロリーは、家畜に投入される栄養やカロリーの一部にすぎないからである。肉ではなく野菜を食べるなら、人間は栄養やカロリーをより効率的に取り込むことができるかもしれない。そのように考えると、CAF O内の動物に投入される大量の飼料は、世界の多くの飢餓者を犠牲にすることにつながる可能性がある(分配的正義の問題)。さらに、肉は男女間の権力関係を反映するものだ、という性的政治からの批判がある。つまり、肉が男らしさと結びつけられるような文化のもとでは、肉食は男女間の権力関係を強化することになる、というのである(性的政治の問題)。これらの倫理的に問題がある特徴を肉食が有しているとすれば、肉を食べ続けることは、はたして倫理的なのだろうか。第3章では、こうした問題をめぐる多様な議論が見事に整理されている。

第4章のテーマは生物工学である。具体的にいえば、遺伝子組み換え技術の是非が検討されている。今日、私たちが口にする食べ物のほとんどは、科学技術の介入がなければ生み出されないのである。また、食料を供給可能にするために科学技術を用いることは、広く受け入れられているはずである。それにもかかわらず、農業や食料のための科学技術のうち、特定の技術は危険視されている。それは、そうした技術の最先端に位置する遺伝子組み換え技術である。はたして、遺伝子組み換え生物(GM作物とGM動物)を生み出すことは、倫理的に許されるのだろうか。大掴みにいえば、GM作物の支持派は、遺伝子組み換え技術によって作物産出量が増加することを根拠にして、遺伝子組み換えの推進を擁護する。これに対して、遺伝子組み換え技術に関しては、殺虫剤や除草剤の使用量が増え生態学的に悪影響を与えるリスクがあるのではないかといった懸念を始め、様々な「外在的」批判が提示されている。また、遺伝子組み換え技術は不自然であるとか、神を演じることであるとかいった「内在的」批判も向

けられることがある。はたして、こうした批判は有効なのかどうか。第4章では、そうした問題が丹念に検討されている。なお、第4章の末尾では、培養肉の是非が考察されているが、この部分はかなり先進的な議論であると思われる。

第5章では、食べ物と健康という、おそらく多くの読者に馴染みのあるテーマが取り上げられている。このテーマには、マスメディアの報道などでもしばしば言及される、多くの問題が関係している。これらの問題に対して、第5章は、倫理的な視点からアプローチする。具体的には、食べ物のリスクと安全性をどのように理解し評価するのか、ラベル表示になにを記載するのが倫理的に正しいのかといった問題から、肥満と摂食障害といった問題まで、多様な問題が考察されている。肥満と摂食障害の問題については、それが個人的な問題にとどまらず、食品、文化、食料政策といった個人を取り巻く社会環境の影響を大きく受けることが強調されている。それだから、肥満や摂食障害の治療や予防についても、社会が、そして国家がどこまで関与すべきなのかということが問題となる。第5章では最後に、栄養主義の問題も取り上げられている。これは食べ物の栄養素を重視する傾向のことであるが（栄養補助食品の蔓延がその例証である）、まさにこれも現代を象徴する問題であろう。

第6章は、食べ物と文化の問題を取り上げている。食べ物は社会的文脈、文化的文脈から切り離すことができない。というのも、どのように食べ物を手に入れるのか、どのように料理をするのか、なにをだれが食べるのかということは、食べる者たちが住まう文化の影響を強く受けるからである。それだから、文化にまつわる様々な論点の問題となる。他者の食文化をどこまで尊重すべきか、他の食文化において実践されている、倫理的に問題のある慣行をどこまで尊重すべきか、倫理的な善悪を決定しうる超文化的な普遍的判断基準は存在しないとすると倫理的相対主義は正しいか、文化的規範はどこまで優先されるべきか。こうしたことが第6章で手際よく整理されている。第6章においては、倫理的相対主義や文化的規範について議論が展開されているが、これは、倫理学の思考法や発想法がどのようなものであるかということを知るのにも極めて有益な部分である。

このように振り返ってみると、本書は、あるいはフード・エシックスという分野は、食べ物という視点から、この世界、あるいは現代社会を描き出す試みなのだと言べることが出来る。そして、食べ物は世界に埋め込まれた一個の社会的問題であるがゆえに、食べ物の思考たるフード・エシックスは、環境倫理学や動物倫理学といった、同じように現代の問題に取り組む様々な分野と交錯することになる。それだから、食べ物について考えることは、私たちが住まうこの世界のあり方を考えることと別のことではないのである。

#### 四 本書の特徴について

本書にはどのような特徴があるだろうか。最初の特徴として挙げるべきは、その網羅性であろう。本書では、私たちの食べ物を生み出すフードシステム（そしてそれに対するオルタナティブな運動）、世界規模での貧困問題、肉食の是非をめぐる問題、遺伝子組み換え生物をめぐる問題、食物と健康の問題、食物と文化をめぐる問題など、様々な話題が取り上げられている。もちろん、食べ物をめぐる問題はこれらで尽きるわけではないだろうが、しかし、フード・エシックスの核となる話題が本書に詰め込まれていることは間違いない。その意味で、本書を一読すれば、フード・エシックスがどのような問題に取り組む分野であるのかを一通り理解することができるはずである。

もう一つの特徴は、著者自身がそう述べているように、本書が情報提供的な本であることである。このことは、本書に多数の統計的資料が用いられていることからわかる。数字のもつ威力が存分に活用されているのである。それだから、本書で駆使されている統計資料を辿ってゆくと、食べ物をめぐる問題の深刻さが客観的に伝わってくると思われる。また、すでに記したように、本書においては、多様な論点や議論が解説されている。ある問題に対する主要な見解が紹介されるだけでなく、それに対する反論、さらには反論に対する応答まで、丁寧に見通しよく紹介されている。それだから、本書を通読すると、ある問題について多様な見解が存在することを知ることができ

る。その結果、たとえば本書を読んだ後にフード・エシックスの問題について考えようと思った読者は、かなり進んだ地点から自身の思考を開始することができるようになる。

この情報的提供的であるという特徴は、三つの特徴、つまりバランスの良さという特徴に結びつくだろう。食べ物の問題にかぎらず、社会問題を論じる際には、特定の立場に肩入れした論述が存在感を示すことだろう。社会問題を論じることは、通常は現状を批判する立場からなされるから、いかに現状が間違っており、だから、いかにそれを変えるべきなのかというかたちで論が立てられることが多いように思われる。つまり、現状に対するオルタナティブな立場が強調される傾向があるだろう。しかし、本書において、著者は禁欲的であって、オルタナティブな立場も、それに対する批判もまた、バランスよく紹介されている。本書を通じて、いわば特定の色に染まらずに、フード・エシックスの問題群と諸理論にアプローチすることができる。

ただし、このような禁欲的な筆運びは、ある種の物足りなさの感覚を生み出すかもしれない。というのも、社会問題を考察する際には、オルタナティブな立場、つまり現状を批判し、その変更を求める書き方が、いわば刺激的であるからである。現状についての私たちの常識や偏見を発見し、それらを解体してゆくことは、学問的営みの醍醐味の一つであると思われるが、この醍醐味はオルタナティブな立場の方が獲得しやすいものかもしれない。食べることにしても、そうではないだろうか。たとえば肉食という食慣習を告発し、それは倫理に反するのではないかと問うことの方が、肉食が氾濫する日常性を肯定するのに比べて、そのような醍醐味を手にしやすいことであろう。とはいえ、重要なのは、そうして提示されるオルタナティブな立場が無条件に正しいとはいえないことである。オルタナティブな立場もさらなる反論に晒されるのである。筆者は、この錯綜状況を整理することを選んだ。だから、本書は、特定の方向に読者を導いてゆくものではなく、それだから、著者自身の見解を提示してゆくものではない。むしろ、著者が行ったのは、食べ物をめぐって紡がれた言説の錯綜の現場で、読者が道に迷わないようにするための地図を作ることだったのである。オルタナティブな思考には、地面を掘り起こし、埋められた宝

物を発見するような醍醐味が備っているのだとすれば、他方、本書の意義は、本書そのものがまさにそのような地図となることによって、どこにその宝物が埋まっているのか、その在り処を見出しやすくしている点にあると思われる。

これまで述べてきたように、本書はたしかに網羅的ではあるが、考察の対象にすべき事柄はもつと存在するかも知れない。思いつく話題をいくつか最後に記しておきたい。まず、本書に含まれていない重要な話題として、哲学や思想が食べ物や食べることをどのように考えてきたか、その系譜を辿る思想的なアプローチを挙げることでできる。この話題が欠落しているのは、ある意味において当然のことである。なぜなら、本書が主題としているのは、あくまでも現代社会で私たちが直面する食料問題なのだからである。とはいえ、哲学者たちは、食べ物と人間との関係について長いあいだ思考を巡らせてきた。その思考が、今日の食料問題に取り組みにあたって、どれほど有益であるか。そうした思想的な整理も重要な課題であるように思われる。

次に、本書では食べることが主たる話題とされているが、反対に、食べないこともまた倫理学的思考の対象になりうるように思われる。本書でも、拒食症について触れられていた。この場合、拒食症は病気として、その治療における自律性が話題とされていた。それとは別に、もつと主体的・意志的に食べないという決断を行う場合が問題となりうるように思われる。たとえば、ハンガーストライキのような場面を想定すればよい。あるいは、終末期において、患者が死期を早めるために食べることを拒否することがある。このような、食べることの主体的な拒否という事例において、食べない者をどのように処遇するのが倫理的に正しいのだろうか。

最後に、垂直方向への深まりが本書には欠けているように思われる。本書は、あくまでも現代的な倫理学の枠のなかで、つまり生態学的影響、動物福祉、自律、正義といったような考慮事項との関係において、食べ物と食べることの倫理を取り扱っている。食べることの倫理は、まずはそうした枠組みで整理され、議論され、深められて行く必要がある。このことは正当でもあり必要でもある。こうした探究を水平方向への拡大と呼ぶことにしよう。し

かし、他方で、食べ物の思考を垂直方向へと掘り下げて行くことも、もう一つの思考の可能性であるように思われる。すでに述べたように、食べることは、他者の生命を食べることである。人間は他者の生命を食べなければ生きてゆけない。これは、人間の宿命、あるいは存在条件である。この存在条件をもっと掘り下げる思考もありうるだろう。何かを食べなければならぬことの罪深さについての思考といってもよい。これは、本書では肉食をめぐる考察で、一部触れられている。しかし、ことは肉食にかぎらない。植物であっても、それは生命である。その思考は、いわゆる倫理学の枠組みを超えて、思想や宗教と言われるような領域に踏み込むことになるのかもしれない。もちろん、この問題を考えたからといって、食わずに済ますことなど人間にはできっこない。だけれども、それが問題としてそこに存在している以上、その問題を思考の課題として引き受けることもなお必要なことであるように思われる。

## おわりに

入門書には幾つかのタイプがある。ここでは二つのタイプを対比してみよう。一つのタイプは、その本が扱っている領域に入るために、敷居を跨ぎやすくするための入門書である。とっつきにくいと思われる話題が、実は身近なものであるとか、親しみやすいかいいうことを示すことによって、その話題にたやすく入り込めるように書かれる入門書が一方にある。他方には、もちろん、そうしたことに配慮しつつも、一旦その領域に入ったのちに、読者を遠くまで運んでくれるような入門書がある。その本を一冊読むことによって、それを読む以前には知らなかった話題や考えに慣じむことで、自分で考え始めるように促がされる入門書がある。本書はどちらのタイプの入門書に近いだろうか。おそらく、後者ではないかと思われる。本書を通読する読者は遠くにまで移動するはずである。だから、食べ物をこれまでとは違った仕方で見られることを学ぶはずである。



今日、この国で何かを食べることは、なんらかのかたちで倫理的問題を孕むことだろう。それにもかかわらず、私たちは、なにかを食べ続けなければならない。そうであるならば、一体どうしたらよいのだろうか。本書を読み終えると、そうした問いのまえに読者は立たされる。もちろん、これまでの食生活を継続してゆくこともできる。あるいは、食事の習慣を変更することもできる。あるいは、もっとラディカルな選択肢を選ぶことも可能である。どれを選ぶべきなのか。そのことを本書は指図しない。「食べ物の選択は究極的には個人的なことである——なにを食べるのか、どこで買い物をするのか、政治的見解はどのようなものであるのか、そういったことを全員が自分で決定するのである」(二頁)。著者は、そのように述べるのみである。だが、そのことを考え決定するための情報、つまり食べ物という視座から眺められたこの世界の姿は、この本のなかで克明に描かれている。だからこそ、この本は読まなければならないのである。

## 読書案内

フード・エシックスの文献をさらに読んでみたいと考えた読者は、たとえば、各章の末尾に掲げられた読書案内を参考にしてはどうだろうか。そこには、フード・エシックスの各トピックについて書かれた代表的な文献が紹介されている。いうまでもなく、それらは英語文献であるが、邦訳が存在するものも多数ある。それらの邦訳文献を読むだけで、相当に視界が広がるように思われる。

遺伝子組み換え、ファストフード、肉食の問題など、個別のトピックについて書かれた日本語の本、邦訳は数多く存在する。ただし、倫理学の立場から包括的に書かれた文献はほとんど存在しないと思われる。そのため、アプローチの角度が異なるけれども、本書のように包括的に食べ物の問題を扱った本として、社会学からの文献を二冊だけ紹介しておく。

エイミー・グブティル他『食の社会学——パラドックスから考える』伊藤茂訳、NTT出版、二〇一六年。  
 榊渥俊子／谷口吉光／立川雅司編『食と農の社会学——生命と地域の視点から』ミネルヴァ書房、二〇一四年。

すでに述べたが、本書は、食べることそれ自体が孕んでいる罪深さ、あるいはその点から見られた人間の存在論といった方向への深まりが欠けている。そのような思考の可能性を秘めた書物として、本書とは多分に色合いを異にするが、次の三冊を紹介したい。

赤坂憲雄『性食考』岩波書店、二〇一七年。

檜垣立哉『食べることの哲学』世界思想社、二〇一八年。

村瀬学『食べる』思想——人が食うもの・神が食うもの』洋泉社、二〇一〇年。